

1. ユダヤ教の聖書とキリスト教の旧約聖書

旧約聖書がユダヤ教の聖典であると同時に、キリスト教の正典(Canon)の一部でもあるということは、一般に広く知られている事実です。ところがこれをどのような文書として理解するかという点で、両者の間には決定的な相違があるのです。それはある意味で当然のことなのですが、その“違い”についてはあまり知られていません。そのようなわけで、この小論が真面目に聖書を学ぼうとしている信仰者の方々が、その知識の不足を補うのに役立つことを願っています。

“正典”という語は、語源的にはヘブライ語のカーネー(葦の意)からギリシア語のカノンとなり、欧米語でもそのまま「規範」「基準」という意味で(英=Canon,独=Kanon)用いらるようになったものです。しかしキリスト教の神学用語としてこの語を考える場合、厳密に言えばそれはある特定の教会会議と関連して理解されねばなりません。正典としての聖書に含まれる文書の範囲を決定したのは歴史の教会であって、この教会を抜きにしては正典という概念も存在し得ないからです。カトリック教会ではトリエント公会議(16世紀)でラテン語聖書の Vulgata が正典として確認されました。

「聖書を信じる」とは、「聖書を正典として結集した歴史的教会の信仰にあずかる」ということを意味しているのですから、「聖なる、普遍的、使徒的、唯一の教会を信じる」(ニケア・コンスタンチノーブル信条)ということ抜きにした“聖書信仰”などというものはナンセンスなのです。

このように、キリスト教の正典を結集し決定したのは歴史的教会であります。それにもかかわらず代々の教会はその“神学的主体”は聖霊であったと確信させられてきました。「聖にして母なる教会が使徒伝来の信仰に基づいて旧約および新約の全書物をそのすべての部分とともに聖なるものであり正典であるとするのは、これらの書物が聖霊の靈感によって書き留められ、神を作者としており、そのようなものとして教会に伝えられてきたからである。」(啓示憲章 11)

教会はその誕生の初期、新約聖書をまだ持っていませんでしたが、すでに正典として旧約聖書を持っていたと言うことが出来ます。つまり決して正典が存在しない教会ではなかったということであり、そこでは旧約の預言の成就としてキリストが理解され、旧約聖書によってキリストの福音が説明されていました。その延長線上でやがて徐々に新約聖書として結集される諸文書が、教会で旧約聖書と共に正典の権威を持つようになったのです。ここで明らかなことは、キリスト教はその出発点において旧約聖書を、ユダヤ教とは全く別の理解で正典としたのであって、その後の歴史で相互に影響しあうことが大いにあったにせよ、別々の道をたどってきたということです。

「同じ聖書の民」というような表現で、あたかもユダヤ教とキリスト教が同じ正典を持っているかのように考えるのは、現実離れした空想にしか過ぎません。この相違を知ることによって、私たちが“キリスト教信仰に立って聖書を学ぶ”ということを正しく理解できるなら、それは 21 世紀の教会にとって有益なことであるに違いありません。

旧約聖書の原典が大部分ヘブライ語で書かれ、その一部はアラム語であることはよく知られていますが、その本文の伝承は紀元 1 世紀末から 8,9 世紀ごろに至る長い期間に活動した“マソラ学者”と呼ばれる人々に負うところが多いと言われています。それらの校訂本のことを私たちはマソラ、あるいはマソラテキスト呼んでいますが、新共同訳やフランシスコ会訳の底本となっている“ヒブリア・ヘブライカ・シュトゥットガルテンシア”は、現代の最も信頼の置けるマソラ印刷本です。

ところが初期のキリスト教会において公式に用いられたのは、七十人訳(LXX)と今日呼ばれているギリシア語の旧約聖書でありました。それは当時のディアスポラ・ユダヤ人の日常語がギリシア語であったからです。ヘレニズム時代にギリシア語がますます世界語になるにしたがって、すでに紀元前 3 世紀の中頃からエジプトでいろいろなギリシア語訳が流布していたようです。これには当時、現在の“続編”に相当する文書群が含まれていて、これももともとはユダヤ教の文書でありましたが、LXX がキリスト教会の聖書となったことに対抗して、ユダヤ教の側では 1 世紀の終わり頃にヘブライ語原典を正典として決定し、その際“続編”に相当する文書群を除外してしまいました。以後まもなくユダヤ教徒の間では LXX は権威を失うに至ります。

そのようなわけで現存している LXX の写本はほとんどみなキリスト教会のものであり、しかもそのうち重要なものは 4,5 世紀の B, A, S の記号で呼ばれる三種のみで、決定本としての LXX が残っているわけではありません。

以上から、ヘブライ語原典のマソラとギリシア語の旧約聖書 LXX との相違点を知ることが、ユダヤ人の聖書とキリスト教の旧約聖書の違いを理解する出発点であることが分かります。*

※ この小論を理解するのに、ヘブライ語やギリシア語の知識は必要ではありません。念のため書き添えておきます。

2. マソラとLXXにおける文書配列の違い

ユダヤ教のヘブライ語正典は、紀元 90 年ごろのヤムニアにおけるラビの会議でそれに含まれる文書の範囲が決定されましたが、現存のヘブライ語原典は 9 世紀に至って完成したマソラと呼ばれるものです。したがってその最古の写本といえども執筆された時から数百年も隔たっているため、それまでの間に本文の破損や写本記者による書き誤り、さらには意図的な修正が加えられたことは十分に考えられます。

現代の出版されているマソラ印刷本は、ですから可能な限りでこれらの欠点を補正した校訂本であることは言うまでもありません。

このマソラテキストは、(1)律法、(2)預言者、(3)諸書、の三部に分けられていて、さらに預言者は前預言者、後預言者、12 小預言者から成っています。諸書は詩篇で始まり、歴代誌で終わっています。この律法と前預言者を合わせると、創世記から列王記に至る第一期の歴史(創造から王国滅亡まで)になります。

これに対してキリスト教の旧約聖書は、LXX が最初から教会の聖書であったため、5 世紀初めに完成したヒエロニムスのラテン語訳(ヴルガタ)を始めとして、すべて LXX の文書配列に従って各国語に翻訳されてきました。ただし現存する LXX の写本は 4.5 世紀のものしかないので、それが初期のテキストと全く同じであるとは限らず、むしろある程度キリスト教信仰に基づいて校訂されている可能性が大きいのです。その配列は翻訳聖書の目次を見れば分かるように、創世記から申命記までのいわゆるモーセ五書、続いてヨシュア記からエステル記までの歴史書、ヨブ記から雅歌に至る知恵文学、それからイザヤからエゼキエルまでの大預言書、そして最後が 12 小預言書となっています。

ヤムニアの会議でヘブライ語正典からは排除されたが LXX には含まれている文書をアポクリファないし外典と呼んでいます。新共同訳聖書で「旧約聖書続編」として区別されているものです。すでに早くからこれをキリスト教の旧約聖書から明確に分ける、ないしは排除するべきであるという意見が存在しました。しかし当時の教会の慣習を考慮したヒエロニムスは、彼のラテン語訳ヴルガタにこれらを含めます。そしてこれが 7 世紀ごろにはローマ教会の聖書となり、16 世紀のトリेंट公会議では公式に正典として確認されました。アポクリファがプロテスタントの刊行する旧約聖書から除外されるようになったのは 19 世紀以降の英国聖書協会の判断によることとされているので、比較的最近のことになります。しかし新共同訳聖書の刊行によって、再び流れが元に戻りました。

近代の各国語への聖書翻訳と出版の主役はが圧倒的にプロテスタント側の活動であったことと、旧約学の世界ではマソラテキストが重視されるために、ユダヤ教の聖書とキリスト教の旧約聖書を対照する場合には通常このアポクリファを除外したものが用いられて来ています。次頁の一覧表もそれに従っています。今回この小論で取り上げたいのは両者の文書配列の違いだけです。

古今のキリスト教の旧約聖書の各国語への翻訳は、一貫して LXX の文書配列に従っていますが、上記のように現存するその写本が 4.5 世紀のものしかないので、いつからそのような配列が LXX に採用されるようになったのかは全く分かりません。むしろ私たちはそこからキリスト教の信仰に基づく旧約聖書理解を読み取るべきでしょう。つまりこの文書配列そのものが、現在残っている LXX 写本の“キリスト教会の聖書”としての特性を示していると理解すべきなのです。

何よりも新約聖書における旧約聖書への言及は、それまでのユダヤ教における理解とは全く異なる新しい立場から行われています。ルカ 24:25-27 で復活のイエスは、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」と書かれています。これが旧約聖書の“新しい”解釈であったことは言うまでもありません。マタ 1:23 のイエスの誕生の預言「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む」も、1コリ 15:4 の「聖書に書いてあるとおり三日目に復活した」も、全てはイエスの復活と昇天後に聖霊によって明らかにされた「秘められた計画」(1コリ 2:1、エフェ 3:3-9 他)であって、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかった」(1コリ 2:9)旧約聖書の新しい解釈がありました。旧約聖書に書かれている預言と約束が新約聖書では成就し実現したと証言されている、そのような信仰と解釈によって LXX の文書配列が整えられて現在の形になったであろうと推測することは、十分に正しいのです。

LXX の最後の文書であるマラキ書で、「見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を整える」(3:1)、「見よ、わたしは、大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす」(3:23)と述べられている洗礼者ヨハネの出現で、旧約聖書と新約聖書が結び付けられているのは、キリスト教会独自の“新しい聖書の形”なのです。

ユダヤ教の聖書

- トーラー(律法)
 - 創世記
 - 出エジプト記
 - レビ記
 - 民数記
 - 申命記
- ネビーイーム(預言者)
 - 前預言者
 - ヨシュア記
 - 士師記
 - サムエル記(上・下)
 - 列王記(上・下)
 - 後預言者
 - イザヤ書
 - エレミヤ書
 - エゼキエル書
 - 12小預言者
 - ホセア書
 - ヨエル書
 - アモス書
 - オバデヤ書
 - ヨナ書
 - ミカ書
 - ナホム書
 - ハバクク書
 - ゼファニヤ書
 - ハガイ書
 - ゼカリヤ書
 - マラキ書
- ケスービーム(諸書)
 - 詩篇
 - 箴言
 - ヨブ記
 - 雅歌
 - ルツ記
 - 哀歌
 - コヘレトの言葉
 - エステル記
 - ダニエル書
 - エズラ記・ネヘミヤ記
 - 歴代誌(上・下)

キリスト教の旧約聖書

- モーセ五書
 - 創世記
 - 出エジプト記
 - レビ記
 - 民数記
 - 申命記
- 歴史書
 - ヨシュア記
 - 士師記
 - ルツ記
 - サムエル記(上)
 - サムエル記(下)
 - 列王記(上)
 - 列王記(下)
 - 歴代誌(上)
 - 歴代誌(下)
 - エズラ記・ネヘミヤ記
 - エステル記
- 知恵文学
 - ヨブ記
 - 詩篇
 - 箴言
 - コヘレトの言葉
 - 雅歌
- 預言書
 - イザヤ書
 - エレミヤ書
 - エゼキエル書
 - ダニエル書
 - ホセア書
 - ヨエル書
 - アモス書
 - オバデヤ書
 - ヨナ書
 - ミカ書
 - ナホム書
 - ハバクク書
 - ゼファニヤ書
 - ハガイ書
 - ゼカリヤ書
 - マラキ書

ここでイスラエル国家とイスラエル史の終焉について、簡単に説明しておく必要があると思います。ローマ軍による紀元 70 年のエルサレム征服と神殿破壊によって、イスラエル国家は歴史上消滅したと一般に考えられています。しかしこのことは、イスラエル回復への希望が直ちに完全に放棄されたことを意味しませんでした。事実この地において、そのような回復を目指した最後の反乱がもう一度だけあったのです。後の歴史家によってその指導者につけられたあだ名によって、バル・コホバの反乱と呼ばれています。これは前回の事件(紀元 66-70 年)と比較できるほど大規模な出来事で、紀元 132 年に勃発し、反乱者たちはかなりの期間エルサレムからユダヤの地を支配したようです。その時に鑄造された独自の“第一年”と“第二年”の硬貨が残っています。強力なローマ軍との長い戦いが遂に終わったのは紀元 135 年で、それ以降イスラエル回復の夢は完全に消えて、ユダヤ人はかつての自分たちの故郷において異邦人となったのでした。

私たちがユダヤ教の聖書と呼ぶマソラテキストは、紀元 1 世紀以降 9 世紀に至る長い期間に活動したマソラ学者の働きに負っていますが、その編集と文書配列には上記の歴史が決定的な影響を与えていることを考慮しなければなりません。ここにキリスト教の旧約聖書との根本的な理解の違いがあるからです。

3. ユダヤ教における聖書理解

バル・コホバによる第二次反乱さえもがローマ軍によって粉砕されたとき、聖書に対するイスラエルの終末論的黙示文学的期待は完全に潰えました。ユダヤ教は近未来におけるそのような終末論的イスラエル回復への期待を、遂に放棄せざるを得なかったのです。彼らにとっての聖書の位置づけは変更されねばなりません。さらに新興のキリスト教が急速に成長し、彼らの聖書を反ユダヤ的な福音の証言の書として転用するようになったことが、ユダヤ教の側が以後そのような近未来的な終末論的解釈を拒否する強力な要因となったと考えられます。

マソラ学者たちはユダヤ教の聖書の本文の決定や保存の仕事の他に、多種多様の伝承を集大成して、いわゆるタルムードを編集しました。そこでの彼らの主な関心事はトーラー(律法)とハラカー(日常の宗教的な規定)であって、換言すれば聖書のいろいろな教えや規則をユダヤ人が日常生活においてどのように解釈し理解して実行すべきかということでした。

しかしそれは、ユダヤ教の聖書がもはや歴史書としては理解されなくなったということではないようなのです。ここからは私は有名なアンカー・バイブル・シリーズ(注解書、聖書辞典と参考書籍を含む)の総編集長であった故デイヴィッド・ノエル・フリードマンの所見を紹介する形で、論述を進めます。

ユダヤ教の理解によれば、彼らの聖書は二つの部分に分けられます。その第一部は天地創造から始まって南北両王国の滅亡とバビロン捕囚に至る物語を扱っています。これが第一期の歴史であって、トーラー(創・出・レビ・民・申命記)とそれに続く前預言者(ヨシュ・士・サム・列王記)から成っています。それは悲劇の物語であって、もしこれだけであるなら全てはそこで終わったこととなります。しかしユダヤ教の聖書には第二部があるのです。すなわちイスラエルの地への帰還の物語です。

この両者は等しく重要であって、いわばイスラエルに与えられた嗣業の地に対する所有権主張の根拠なのです。つまり最初の土地授与が条件付きであって(申 4:40,8:11-20 参照)、彼らがその掟と戒めを守ることに失敗して一度は嗣業の地を失ったとしても、それにもかかわらずこの歴史を超えてなお、神が創世記 15 章でアブラハムに与えられた約束(その後アブラハムに、またその子孫に繰り返し語られている)は確かだということです。それは無条件の約束であり、取り消されることはありません。

「その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。“あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、…”」(創 15:18)

現在のユダヤ教の聖書印刷本の最後の文書は歴代誌で、これがエズラ記・ネヘミヤ記の後に置かれています。理由は正典に加えられた時期がエズラ記・ネヘミヤ記の方が先で、歴代誌は後になって加えられたためであるというのが通説です。しかしこれは内容的に見ると順序が逆で、歴代誌は人類の創造から書き起こして歴史のある時点まで到達し、そこからエズラ・ネヘミヤの話が続きます。ところが紀元 900 年頃のアレクサンドリア写本と紀元 1000 年より少し後のものであるレニングラード写本(フリードマンは最も良い最古の写本だと考える)では、歴代誌はネビーイーム(預言者)の直後に置かれていて、最後のエズラ記・ネヘミヤ記との両歴史書でケスービーム(諸書)を取り囲む形になっているのです。

歴代誌は“アダム”という語で始まっていて、明らかに創世記を思い浮かべながら歴史をたどっていきます。しかし今度は約束の地を失った歴史だけではなくて、再びそれを回復した歴史が語られます。民は捕囚の地から帰り、神殿は再建されてエルサレムが回復し、ネヘミヤによる城壁の修復によってエルサレムは再び城壁に囲まれた街となりました。ただ一つ足りないのは、未だ完全な独立国ではなくて、彼ら自身の王を立てることが出来ていないこと、つまりそれは将来に待たなければならないのです。それが歴史の事実であって、この将来を指し示すものとして、それからさらに 250 年後の黙示文学であるダニエル書が正典に加えられました。

大切なことは、ユダヤ教の聖書はその全体において、イスラエルの嗣業の地に対する所有権主張の書であるということです。それはどのようにして神から約束されたか、どのようにしてそれを得、どのようにしてそれを失い、そしてどのように再びそれを回復したかの物語です。ですから最後にはなお将来のメシア到来があるはずであって、それは未だ実現していないのです。

以上は私が理解したフリードマンの所見の一部なのですが(そして現代のユダヤ教内部でも幅広い種々の見解の相違があるのですが)、それは現代のイスラエル共和国が建国以後の中東戦争による占領地を返還するどころか、今もさらにそこに入植地を確実に拡げている、その宗教的背景を理解する重要なヒントになると思うのです。

4. キリスト教会における聖書理解

私自身はプロテスタント教会の出身なので、宗教改革の基本原則の一つである“聖書のみ”が強調される環境で育ちました。そこでは当然、旧約聖書はキリスト証言の書であり、キリスト(の福音)は旧約聖書の完成であるということが、すべての信者の共通理解であると共に唯一の正しい聖書解釈であります。私はそのように信じる信仰に立って神学を学び、福音の証し人として聖書の研究を続けてきました。

しかしここで重要なことは、そのように信じる信仰、そのように理解する聖書解釈の根拠は何かということです。一般に多くの信者が「そう聞かされた、教えられた」というレベルで“信じたつもり”になっていたために、現代では多くの人々が信仰を失ったり捨てたりするようになりました。私の専門である旧約学の世界では、特にファンダメンタルな(聖書を全て文字通りに信じる)育ちの人々で今は信仰を捨てたと公言する学者が多くいます。学問の世界に入って聖書を相対化して理解するようになったために、過去の単純で純真な信仰が維持できなくなったのです。

それでは、信仰と学問は両立し得ないのでしょうか。純真な信仰を維持するには、学問を拒否すべきなのでしょうか。そのように考えている信者も多いようです。しかし、そんなただの迷信あるいは盲信のような(それを“敬虔”と考えている人も多い)ものに、私は到底満足などではしません。あなたはいかがですか？

私は神学校で先ず最初に、“(正しい意味での)神学は教会の学である”ということを知りました。それは学問でありますから、あくまでも学問としての客観性と合理性を備えたものでなければなりません。そして同時に教会の学でありますから、“教会の信仰”に固く立った学問でなければなりません。キリスト教会における聖書理解も、単なる個人の主観ではなくて、神学的にしっかりした(説得力のある)理解でなければなりません。

聖書に書かれていることは全て歴史的事実なのかという単純な質問に対して、あっさり白か黒かをつけるような仕方では答えを出してしまう低レベルの思考が、世間では普通です。私はあえてここでは本格的な論議を避けて、むしろ現代の身近な世論の現象を一つのヒントとして例示したいと思います。我が国では新聞や公共放送が比較的公平な報道を行っている、多くの国民に信頼されてきました。ところが実際には報道各社によって、あるいはニュース解説者によって、まるで相反し対立するような情報が流されて人々の判断を左右する傾向が強い時代になったのです。しかし極端な例外を除いてそれらの情報はすべて同一の事実や出来事に起点があるのです。フェイクニュース(嘘のニュース)などというものよりも、ただそれぞれの立場にとって都合だったり不都合であるニュースが流される・・・、つまり解説や解釈の観点がいろいろあるということです。

旧約にせよ新約にせよ、聖書の著者や編集者はそれぞれの時代の信仰的、神学的立場に従ってそれらの文書を後世に残したのであって、読者がそのすべてを事実ないし真実として受け取ることを期待していたに違いないのです。もちろんその時代の人々が、近代や現代と同じ歴史観に立って思考したものではありませんから、聖書の記述をすべて現代の科学的基準で“正確である”と信じるのが無理であると同時に、またそれらを単なる古代の遺物に過ぎないと単純に切り捨てるのも正しくありません。大切なことは、それらの信仰的、神学的立場を正しく読み取ることなのです。

この小論の第一節で私は、「キリスト教はその出発点において旧約聖書を、ユダヤ教とは全く別の理解で正典とした」と書きました。もう一步掘り下げて述べるなら、新約聖書がキリストとその福音を旧約の預言の成就として説明したのは原始教会の“一つの解釈”であって、決して誰にとっても自明な客観的論理的かつ科学的な結論ではないということです。それは聖霊の導きにより(ヨハ 14:26)、使徒たちの証言によって証しされた(ヨハ 15:26-27)“キリスト教の”信仰による解釈(ヘブ 11:1-3)に他なりません。教会はこのようなキリスト教の福音伝承が、神の右の座に着いておられる生けるキリストによって与えられ、今も導かれていることを信じているのです(1コリ 2:11-16 参照)。

あなたは「復活し、天に昇り、父の右の座に着いておられ・・・、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られる」(2テア・コンスタンチノーブル信条)キリストを信じていますか？

ですから、このような“教会の信仰”がないと、聖書はそれぞれの自由な立場で研究され解釈されるので、もはやキリスト教の信仰を養う“正典”としての役割を果たさなくなります。まさにその意味で、ユダヤ教の聖書とキリスト教の旧約聖書は同じ文書群から成っているにも拘らず、事実上“別物”であると言わなければなりません。私たちはキリスト教の信者として“正典”を理解しているのであって、それとは別世界であるユダヤ教の人々に対して「あなた方の聖書理解は間違っている」と口出しする立場にはないことを承知すべきであります。